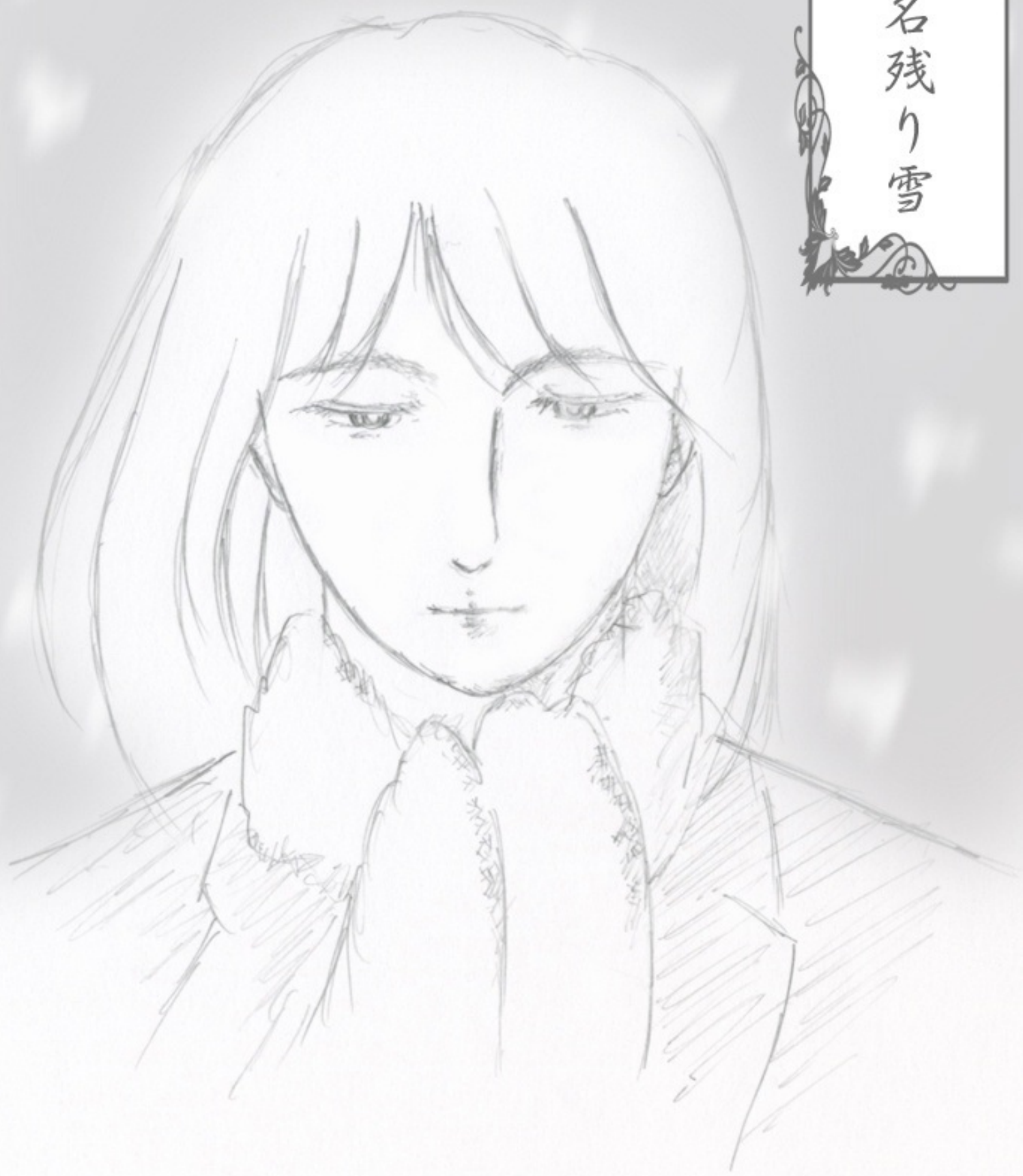


花舞い、名残り雪



Side-A

いまどき、引越しの挨拶をもってくる女の子がいるなんて、ってそのとき僕は思ったんだ。

「こんにちは、隣に越してきた野宮です。」

そういった君は精一杯のおしゃれと、なんとか隠そうとしたんだろうけど、でも名前の抑揚に訛りが残ってた。

多分しっかりとしたお母さんに育てられたんだろうな、って思った。

背中越しに、あの日の雪みたいな花びらが舞っていたっけ。

シャワーしか出来ない安アパートで、上京したばかりの人には分かりにくいごちゃごちゃとした下町で、だから「買い物はスーパーより商店街の方が安いし、お風呂は銭湯があるけど、案内しようか？」って言ったときの気持ちは、本当にぺらっぺらの同情でしか無かったんだ。

でも、その日、もう一度このアパートの階段をカンカンと音をさせて上がってくるころには、この子といたら、このクソみたいな暮らしも、もうちょっとましになるかもって思った。

「ねえ、アジ二匹買ってきた。食べるでしょ。」

「半ば強制じゃないか。」

「じゃあ、キッチン貸してね。」

「また、オレのところかあ？」

「だって、服に匂いつくんだもん。」

まあ、窓開けて、換気扇回しとけば一時間ぐらいで匂いは抜けるだろうけど。

「魚なんか食うからだよ。」

「だって、魚好きなんだもん。」

猫かお前は。

彼女は、知り合いの居ない新しい街が不安で、僕はもう長いこと、この街に何も感じられずに居た。

だから、あの花舞いの日に、僕達はお互いを見つけたんだと思う。

いまさら、坂道を並んで歩くところから始めるなんて思ってなかった。
帰りに駅の前で何度も時計を見るなんてこと、論外だと思った。

でも、喫茶店のガラスに映ってるのに気づかないで、後ろから忍び寄る彼女を見るのが好きだった。

よし、っと。イラスト5点終了。明日クライアントに届けたら、しばらくは
余裕が出来るな。

あいつの学校そろそろ試験休みじゃなかったっけ。
締め切りに追われてあんまりかまってやれなかったから、怒ってるかなあ。

“コンコン”

なんだよ、あいつ超能力者か。

薄いドアの向こうに立ってたのは、もう何時間も泣いたように目を腫らした
彼女だった。

「どうした。」

何かいうと嗚咽がこぼれだす、そんな顔だった。

「とりあえず入ったら。」

一つだけ頷いて、靴を脱いで、僕は冷たい夜の空気を遮った。

「座ったら。」

その声は聞こえなかったんだろうか。丸い蛍光灯の下で、後ろを向いて拳を
握りしめたまま、彼女は話し始めた。

「お母さんが倒れて入院したの。・・・命は助かったけど、右半分
後遺症が残るって。向こうには父さんと弟しかいなくて、・・・私が介護して
あげないと、どうしようもない。

生きててくれたのは本当にうれしいけど、わたし、、、萱野さんと出会って、
なんとかこっちでやっていけそうと思ってたのに。」

そのあと、震える肩と崩れそうな心を抱くことしか、僕にはできなかった。
“行くな”っていう言葉を、僕はいえなかった。

そして二日後、小さなスーツケースだけを持って、彼女は雪の降る東京を

後にした。

雪の降る朝、何もかもを心にしまいこんだ彼女を、僕はとてもきれいだと思った。

“こんこん”

なんだろう、こんなときに。

「はい。」

「あ、私、隣に引っ越してきた大磯といいます。ご、ごあいさつにと思ひまして。」
くすっ。よっぽどこういう人が巡り合わせる部屋なんだな。

「これ、つまらないものですけど。」

「それはご丁寧にも。でも、僕、もうすぐ引っ越すんです。」

「そうなんですか。」

「ええ、よく考えて、やっぱり大事な人のそばにいてあげるのが大切だって
思ったんです。」

「女の人ですか、へー、すごいなー。」

「すごくなんかないですよ。あれ、頭に花びらついでる。」

「えー、やだもう。何度も鏡みたのに・・・さいてー。」

これから僕が向かう彼女の町に、まだ雪は残っているだろうか。

Side-B

ああ、どきどきするー。

合格発表よりどきどきするかも。へんな人が出てきたら、速攻で引っ越そかね。

「ごめんください。」（・・・聞こえんのかな）。すうー。

“がちゃ”

「・・・どなた？」

ひっ。

「こんにちは、隣に越してきた野宮です。」

あせったー、、、あせって失敗したあー。いきなりあけるのなしだあ。

「ああ、お隣さんね。よろしく。そこに書いてあるけど萱野っていいます。

学生さん？」

「はい。」 しょぼーん。

「そっか。じゃあ、この辺分かりにくいでしょ。買い物はスーパーより

商店街の方が安いし、お風呂は銭湯があるけど、案内しようか？」

こらまた急な申し出だあ。でもいい人かも。

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて。ホホ・・・。」

確かにこの街は路地が入り組んでいて分かりにくいんだあ。一人で放り出されたら、同ずところを何回もぐるぐる回ってただろなあ。けど、想像していたビルばかりのところじゃなくて、普通の人がたくさん居てすごくあったかい感じもした。

萱野さんも、あごひげの割にはあったかい人みたいだ。

「ちゃんとお飯食べねばダメです。」

「いやあ、夜昼ない仕事だからね。つい忘れちゃうんだよ。締め切り前なんか、カップめんばっか。」

わたしも、かあちゃんが作ってくれたから受験乗り切れたようなもんだべ。母ちゃん書いてくれたレシピ、試してみねば。

「萱野さーん。ねえ、アジ二匹買ってきた。食べるでしょ。」

「半ば強制じゃないか。」

「じゃあ、キッチン貸してね。」

「また、オレのところかあ？」

「だって、服に匂いつくんだもん。」

というのは口実で、萱野さんのイラストとても素敵だあ。色が綺麗で雑誌とかに載ってるのと全然違う。

「魚なんか食うからだよ。」

「だって、魚すきなんだもん。」

萱野さんのイラストも好きだあ。

駅前で待ち合わせて帰るなんて、まるでデート見たいだべー。

くっくっく……。

みつけた。気づかれないように、そーっと、そーっと……私って不審者？

「お帰りー。」

「きゃあ！」

なしてー、なして分かるのー。

「萱野さんの意地悪。」

「後ろから襲い掛かっておいて、何が意地悪だよ。」

「少女を苛めた。」

「なにが少女だ。あー、アイスでも食うか。」

ひゃっほー、アイスだアイスだ。

「私、棒付のがいい。」

「少女って言うより、単なるガキだな。」

「うん、、、うん、、、それで大丈夫なん？、、、うん。分かった。

出来るだけ、はよう帰るう。

心配せんで大丈夫。残念は残念だけど、こういうときこそ家族で支えあわねば、、、うん。だからおとさんは、そないに気いつかわんでええ。」

だめだ、、、、大丈夫なんて大嘘だ、、、、。

一生懸命勉強して、折角こっちの暮らしにも慣れて、これからって時なのに、戻らないといけない。そんなのありえんよ！

けど、、、私を育ててくれた母さんが。私が大学に受かったのを一番喜んでくれた母さんが……………。

私は、幸せになってはいかんのやろうか！

萱野さん、教えて。私どうすればいいと思う。

萱野さんは、ただやさしく私を抱きしめてくれた。何時間も何時間も。お母さん以外に、こんなに優しく私を抱いてくれた人っていなかった。この人が描くイラストのように、優しくて綺麗な心をもっている。この人と出会えただけでもよかったって、そう思えた。

けっばれ、わたし。

「向うに帰って、落ち着いたら手紙を書きます。」

「うん。」

「こんなとこまで送ってくれてありがとう。」

「うん。」

「じゃ、乗ります。萱野さんお元気で。」

「負けんな。」

「ハイ。」

「かあさん、雪みえよる？」

「ああ……………」

雪が降るたびにあの日のことを思い出す。

名残雪が降るホームで、ずっとずっと小さくなるまで見送ってくれた人。

「かあさん、りんごでもむこうかね。」

「ああ……………」

あの時、あの人は“負けんな”って言ってくれた。

きっとそうやって、あの街で一人で生きてきたんだろう。今頃は桜の舞っているあの街で。

“これオザキDrに戻しといて。”

“はい、わかりましたー。”

・・・まるで迷宮だなあ。

「はい、何か御用でしょうか。」

「すみません、こちらに野宮さんてかた、入院してらっしゃいますか。」